

2023年12月17日 No.3698

先週の講壇から

「わたしのすぐ近くに」

フィリピンへの手紙 第4章 4節～7節

聖句「あなたがたの広い心がすべての人に知られるようにしなさい。主はすぐ近くにおられます。」(4:5)

1. 《アドベント》 伝統的な「教会暦」では、アドベント第1主日から一年が始まるようにされていました。「一年の計は元旦にあり」と言いますから、キリスト者にとっては、差し詰め「一年の計はアドベントにあり」なのです。初詣は「三が日」しかありませんが、期間は20日余、主日礼拝も4回あります。無くてならぬものは多くはありません。必要な事は1つだけです。
 2. 《到来する主》 日本でもアドベントカレンダー等を通して定着しつつあるアドベントですが、昔は「待降節」と呼んでいました。篤い祈りをもって待ち望むのは結構ですが、「待ち望むこと」に偏重すると、信仰に歪みが生じます。「待ち望まない者にはクリスマスが来ない」かのような表現がされ、その思い込みが独善に繋がるのです。牧師たちも信徒向けには「主の降誕を待ち望み、備えをしなければクリスマスは来ない」と語り、イヴ礼拝には未信者向けに「今宵、世界中の全ての人のために、御子イエスがお生まれになった」と語り、二枚舌みたいなことに成ってしまいました。ラテン語の「アドウェントゥス」は「到来」です。私たちが待つとか待たないとかではなく、主御自身が来られるのです。
- 《喜びの勧め》 クリスマスに受洗する信徒の訓練養成の期間として、アドベントが用いられていたこともあって「待ち望むこと」が強調されたのでしょう。しかし本来、キリスト者に成るのに修行も条件も要りません。神さまを求める心だけです。「若気の至り」等と嘯(うそぶ)いて棄教する人もいますが、イエスさまは「それでも構わないんだ」と仰るのです。なぜなら主は、眠っているベツレヘムの市民のためにも、彼を十字架に掛けて槍で突き刺した人たちのためにも来られたからです。「協会訳」や「新改訳」は「主は近い」と、再臨待望を主眼に据えた解釈でしたが、「新共同訳」は「主はすぐ近くにおられます」、だから「常に喜びなさい」と訳しているのです。主が私たちの傍らにいてくださることを感じ取ることが出来れば、感謝と喜びに満たされ、もっと「広い心」でいられるはずです。

朝日研一朗牧師